

学位請求論文審査報告書

氏 名 味 村 考 祐

論文題目 <伝統>と理解——ガダマーの哲学的解釈学の研究——

審査委員	主査	大谷大学教授 博士（文学）〔京都大学〕	朴 一 功
	副査	大谷大学教授	門 脇 健
	副査	大谷大学教授	渡 辺 啓 真
	副査	大谷大学名誉教授	池 上 哲 司

I. 論文内容の要旨

本論文は、現代ドイツの哲学者ガダマー（Hans-Georg Gadamer, 1900-2002）が『真理と方法』（*Wahrheit und Methode*, 1960）で展開している哲学的解釈学の研究である。テキスト理解の方法として「解釈学（Hermeneutik）」が構想されたのは17世紀に遡るが、ガダマーの解釈学はそうした技法論の確立を目指すものではない。『真理と方法』はむしろ、「理解はいかにして可能となるか」という哲学的問いを立て、理解という現象そのものを見きわめることによって、人間の世界経験全体における真理認識を解明しようとするものである。本論文は二つの中心的な問いにかかわる。第一、伝統はテキスト理解においてどのような役割を果たすか。第二、伝統の本質が「保持」とされる意味は何か。本論文はこれらに取り組みることによって、ガダマーにおける伝統と理解の関係を明らかにしようとするものである。論文全体は、序論、第1章「哲学的解釈学の課題」、第2章「理解における認識の根拠の問題」、第3章「解釈学における伝統の契機」、第4章「伝統の両義性」、第5章「伝統の摂取」、そして結論から成っている。

第1章は、解釈学において伝統概念が要請されてくる経緯を論じている。近代解釈学は神学と文献学の分野から起こり、神学においてキリスト教の伝統的教義によることなく聖書を理解しようとするプロテスタントの宗教改革が起きたときに、また文献学では古典古代の文学を再発見しようとするときに、テキスト理解の問題が生じた。過去の世界に書かれたものは疎遠で異質に感じられ、こうした「時代の隔たり」の意識から解釈の課題において理解そのものが主題化されることになる。シュライアマッハー（1768-1834）はこの異質性を著者の「個性」に結びつけ、テキスト理解を他者（著者）の意図の再構成と考え、他者理解の可能性を感情による直接的共感（感情移入）に求めた。だが、ガダマーによると、伝統から離れたそのような心理学的解釈は、テキストの内容理解という課題を放棄している。歴史の理解を考慮に入れた解釈学を構想したのはディルタイ（1833-1911）であったが、第2章ではガダマーのディルタイ批判が検討される。シュライアマッハーはテキストのみな

らず発話や芸術作品などの美的構成物をも個人の内面の表れとして解釈学の対象としたが、ディルタイはその対象を精神科学の領野にまで拡大し、解釈学をあらゆる人間的なく生の表出を理解する手段とした。彼はとりわけ歴史認識の客観性の根拠を探し求め、それを科学的因果関係ではなく、個人の「体験 (Erlebnis)」がもつ「構造」に見出す。しかし、個人的体験に基づく構造の考えは歴史の理解にいかに応用されうるのか。ディルタイは、「全体は個々のものから、個々のものは全体から理解できる」という解釈学の原則によって、歴史の認識可能性を個人の生の現実を求めるが、ガダマーはこれを「生は自らによって、自らを解釈する」と評し、そうした「生」を思弁的なものと批判したうえで、解釈者の歴史 (伝統) への「帰属性」を主張する。

ここから伝統の問題が浮上し、第3章ではその役割が考察される。ガダマーはハイデガー (1889-1976) が主張した理解の先行構造および循環構造に依拠し、伝統 (匿名化した権威) ないしそれに基づく先入見をテキスト理解を可能にする契機と見る。他方で、彼は伝統の本質を「保持 (Bewahrung)」とする。なぜ先入見が必要とされ、また「保持」はどのような意味をもつのか。手がかりは、彼の「地平融合 (Horizontverschmelzung)」の概念にある。時代の隔たりがテキスト理解を困難にするのは、テキストの著者を解釈者とは異なる地平 (視界) に閉じ込めるからである。著者と解釈者が互いに異なる地平に立つとき、テキスト理解は遂行不可能に見える。しかし、地平はテキスト理解のプロセスにおいて顕在化するのであって、あらかじめ解釈者に意識されるわけではない。地平とは「われわれがそこへ歩み入り、われわれとともに動くもの」である。けれどもテキスト理解は読み手にすべてが委ねられており、テキストの語りを捉え損ねる危険性がたえず存在する。それは「先入見を働かせること」によって取り除かれるとガダマーは主張するが、その鍵は、過去の地平が際立てられるとともに、先入見も先入見として際立てられる点にある。ここから先入見の妥当性が中断され、理解の投げかけ (先行投企) の修正が要請される。理解とは、過去と現在の地平融合のプロセスに基づき、こうした理解を通じて伝統が保持される。

第4章は、ガダマーに対する批判の検討である。批判的意見はハーバーマス (1929-) から出された。それは伝統を権威と見なすことと伝統を摂取することは同時に語れないというものである。一方では伝統の権威が理解の前提とされるが、他方ではその権威をも打ち砕いて伝統を新たに摂取する必要があるとされているからである。本論文はこの批判に対して、伝統が「認識の自由」を可能にする側面に着目する。解釈者自身が歴史の作用を受けているという意識 (「作用史的意識」と呼ばれる) の内に、先入見の根本性が認められるが、この先入見はわれわれの視野を制限することによって、かえってテキスト理解を可能にするものである。そしてテキスト解釈において要請されることは、われわれ自身の関心を呼び起こす問いを獲得することであり、解釈者は自分の置かれている状況にテキストを「適用」しなければならない。ガダマーによれば、「テキストの意味がおよぶところは一般に、著者の意図をはるかに超えたところまで達する」からである。

最終章は、ガダマーによるプラトン解釈の実例によって、伝統と理解の関係を確認して

いる。プラトンは『国家』で詩人（作家）を追放すべきと主張している。「真似（ミーメーシス）」を仕事とする詩人は人々に害毒を与えると見られるからである。詩人はあらゆる技術、徳、さらに神についてさえ知っているかのように語るが、「実際にあるものをあえるがままに真似て写す」のではなく、「見える姿を見えるがままに真似て写す」。ガダマーは『真理と方法』第1部で芸術経験の真理について論じ、見かけを真似る創作は本質認識からかけ離れているとするプラトンに対して、「真似」としての創作には本質の再認識が含まれていると解する。ここから三点が確認される。第一、理解の条件は伝承への参与にある、第二、テキスト理解はプラトンの意図の再構成ではなく、彼の問題にしていたことを問うことにある、第三、理解の目標は語られたものを自分のものにするということである。

結論では、伝統と理解の補完関係が主張される。伝統は理性によって承認され、引き受けられ、世界理解の契機となりうる。逆に、理解は伝統を摂取し、自分のものになるまで仕上げ、保持する。だが、より重要なこととして、ガダマーの解釈学には、伝えられているものを新たなものとして自分のものにするという視点が含まれていると論定する。

II. 論文審査結果の要旨

本論文は、現代ドイツの哲学者ガダマー（1900-2002）が『真理と方法』（*Wahrheit und Methode*, 1960）で展開している哲学的解釈学において、彼の〈伝統〉概念とテキスト理解がどのような関係にあるかを考察するものである。解釈学は近代にテキスト理解の方法として構想されたが、ガダマーの解釈学は技法論の確立を目指すものではない。むしろ「理解はいかにして可能となるか」という哲学的問いを立て、理解という現象を見きわめることによって、人間の世界経験全体における真理認識を解明しようとするものである。『真理と方法』の序論で、論究の目標は、「科学的方法の支配領域を越えたところにある真理の経験をあまねく求め、さらにその経験独自の正当性を問うところにある」と言われ、科学の外部にある経験（哲学、芸術、および歴史そのものの経験）の中で開示される真理は科学的方法では検証できないものと見なされる。しかしガダマーは、「テキストの理解および解釈は、単に学問の関心にとどまらず、明らかに人間の世界経験全体にかかわっている」としたうえで、他方、「伝統（伝承）の理解においては、テキストの理解にとどまらず、様々な洞察が獲得されたり、様々な真理が認識されたりする」とも主張している。それゆえ、人間の世界経験全体を射程に入れようとするガダマーの解釈学で要となる問題はテキスト理解であり、そこに伝統がどのような役割を果たすのかということである。本論文が伝統と理解の関係に焦点を定めていることは本質的な意義を有する。

本論文の第1章は、解釈学において伝統概念が要請される経緯を明らかにしているが、それはシュライアマッハー批判を通じてである。近代解釈学は神学と文献学の分野から起こったが、聖書であれ古典古代の文学であれ、「時代の隔たり」によって理解困難になったテキストの部分については、背景となる歴史の考察を経由して解釈する方法も考えられるが、シュライアマッハーはテキスト理解を著者の意図の再構成に求めた。本章はこうした

心理学的解釈をガダマーに基づいて批判するとともに、第2章では、解釈学をあらゆる人間的なく生の表出を>理解する手段としたディルタイへの批判がなされている。ディルタイは歴史認識の客観性の根拠を探し求め、それを科学的因果関係ではなく、個人の「体験」のもつ「構造」に見出すが、その基盤となる、主客の源泉としての<生>の概念は、ガダマーによって思弁的なものとして斥けられる。以上の二章は、ガダマーの論述の解説にとどまるものであって、論者の独自性は認められないが、解釈者の歴史性に留意して、伝統概念が要請される経緯を確認している点に基礎的な意義を認めることができる。

第3章では伝統の役割が考察され、ハイデガーに依拠したガダマーの解釈学の中心部が論じられる。論者は、伝統（匿名化した権威）ないし先入見をテキスト理解を可能にする契機と位置づけるガダマーの視点、および伝統の「保持」の意味を解明する手がかりを、「地平融合」の概念に求め、地平の動性に着眼した重要な議論を展開している。理解の投げかけ（先行投企）、先入見の妥当性の中断、修正による、過去と現在の地平融合を通じて伝統が保持されるとする分析は正当であり、すぐれている。が、論者が古典の規範性を「事柄に従う規範」に結びつける試みは飛躍であって、再考の余地があろう。

第4章は、ガダマーの見解に対するハーバーマスの批判を検討している。批判点は、伝統の権威が理解の前提とされながら、伝統の新たな摂取が説かれているところにある。論者はこれに対して、伝統が認識を制限するだけでなく、「認識の自由」を可能にするという、伝統の「両義性」に着眼することによって応答し、テキスト解釈における問いの獲得、および解釈者の置かれている状況へのテキストの「適用」を論じており、次章とともに、本論文の意義深い論述となっている。

第5章は、ガダマーによるプラトン解釈の実例に基づき、伝統と理解の関係を確認している。扱われる題材はプラトンの「詩人追放論」である。ガダマーは「真似」の概念を手がかりに、『真理と方法』第1部で芸術経験における真理について論じ、プラトンと正反対の見方を展開している。ここから論者は、理解の条件は伝承への参与にあり、テキスト理解は著者の意図の再構成ではなく、著者にとって問題にされていたことをみずから問うことであって、理解の目標は語られたものを摂取し、新たに自分のものにするものであると論定している。論者は『真理と方法』を第2部から第1部へと遡ってガダマーの芸術論に踏み込み、彼の解釈学の創造的契機を浮き彫りにし、結論では、ガダマーの解釈学における伝統と理解の補完関係、および伝統の保持における生産性を確認している。

本論文は、鍵となる「理解」の概念そのものに関する批判的な検討が今後の課題として残るものの、前半部（第1～2章）で『真理と方法』におけるガダマーの基本的な視点を堅実に見きわめ、後半部（第3～5章）ではガダマーの解釈学の特質をあぶり出すことによって、伝統と理解の創造的な補完関係という重要な結論を導き出すことに成功している。

審査に必要とされる最終試験については、審査委員全員により2018年1月10日に試問を行った。その結果、審査委員一同一致して、味村考祐に大谷大学博士（文学）の学位を授与する事が適当と判断した。

